

授業リフレクションとしてのラベルワークの実践

京都精華大学人文学部 筒井洋一

2009年まで、本分科会は、高校側・大学側双方の発表を中心とする伝統的な方法で運営していた。しかし、2010年から分科会形式を、報告者からの問題提起を触媒として、分科会参加者自身がどれだけ学んでいくのかというアクティブラーニング的方法へと転換した。この転換は、報告者から参加者への一方向の議論ではなく、むしろ参加者同士のインタラクションを深めることで、より創造的な議論を実現したかったからである。

今回の分科会のテーマを「授業リフレクションとしてのラベルワークの実践」とした。報告者は、高校・大学双方から来て頂いたが、いずれの報告者もラベルワークという手法の専門家とすることで、両者が一体となった報告を心がけて頂いた。

1. 授業リフレクションとは

分科会冒頭は、コーディネーターの筒井が分科会のテーマについて説明した。大学の授業（そして、高校でもたぶん同じ）では、教員が学生に対して、知識や考え方をどれだけ伝えたかということが習慣化している。しかし、たとえ、教員が体系的に内容を教えたとしても、受け取る側の学生がどこまで学んだかはわかっていない。そこで、教員がどれだけ伝えたかではなく、学生がどこまで学んだかという「教授中心から学習中心への転換」が今後の教育の方向性である。

その転換方法の一つとして、授業内でのリフレクション（振り返り）がある。リフレクション自体は、授業前後の短時間を使ったり、私の授業の場合には、15週中3週リフレクションに充当してりしている。私の場合、4週1モジュールという授業単位を3モジュール積み上げ方式にして、モジュール最終週をリフレクションに充てている。こういうリフレクションを組み込みながら、アクティブラーニング型授業を展開している。

米国のFD専門家のL. Dee Finkは、アクティブラーニング型授業の特徴について、Passive Learning、Activity、Reflectionの三つに分類している。Passive Learningとは、知識や考え方の提供であり、伝統的な教員によるレクチャーを意味している。Activityとは、レクチャー後に、それを観察や取材、実践などで身につけるということである。Reflectionとは、前二者によって、学生がどこまで習得しているのかを検証することである。Passive LearningとActivityとで、学生の知識とその活用を進めて、Reflectionでそれを検証するのである。つまり、アクティブラーニングは、経験的な活動を講義に取り入れたり、知識・情報等を取得するだけではなく、そこにリフレクションを入れることで、体験の価値が強化され、学生の気付きと次につながる学習へと導く機能を持っているのである。

しかし、多くのアクティブラーニング型授業では前二者で終わっている授業が多い。検証自体は、伝統的な筆記試験やレポート等で代用されているからである。むしろ、三つ揃って初めてアクティブラーニングと言えるのである。Finkは、「学習中心にするならば、教員側をチェックするのではなく、学習側がどこまで学習できたかをチェックすべき」と述べている。つまり、リフレクションは学習成果を測る方法なのである。山本以和子は、「ひとつひとつの講義が価値を帯び、自分にとっての重要性を本当に認識できる状況は、その学生自身の目標と目標に

対する現在位置との差を認識していなければなかなか描くことができない。目標の到達度と初期に設定した目標との差が分かれば、次にすべき学習も見えてきて、主体性をもった学習スタイルへ変容すると考えられる」と述べている。このように授業目標と学生の現状とのギャップを学生自らが確認できるのがリフレクションである。

2. ラベルワークの実践

そのギャップを確認する方法としては、様々なリフレクションの方法があるが、それらの中で、あえてラベルワークを取り上げる理由は、ワークを行う容易さである。授業終了後にリフレクションをおこなうとすれば、時間的にも限定されてしまい、容易に取り組める方法が望ましい。

今回報告および実習をおこなっていただくラベルワークを、授業リフレクションの一方法と位置づけている。授業途中や授業終了後に、定型ラベルに学生が自省した内容を書くことは、Donald A. Schon が述べている「行為がおこなわれている最中にも〈意識〉はそれらの出来事をモニターするという」反省的实践 (reflective practice) を意味する。授業の中で、できるだけ簡便にリフレクションを書きとめ、それを後に再構成することで、再度リフレクションできるツールとしてラベルワークの実用性は高い。これについて、分科会では、レクチャーと実習を織り込んで進行していった。

分科会参加者は、40名ほどであり、それを4～5名の職種混成チームに分けて取り組んだ。最初に、コーディネーターの筒井が、授業リフレクションとラベルワークの意義についてレクチャーをおこなった後は、報告者の長谷川伸氏と中地譲治氏とで進行していった。以後の説明については、お二人の報告を参考にさせていただきたい。

3. 分科会を経た経験から

他の分科会（英語、数学、理科）に比べて、表現技法分科会においては、コーディネーターが大学コンソーシアム京都高大連携推進室メンバーである筒井が継続的に担当している。それによって、年度をまたいで問題意識を共有しやすいのである。高校と大学から二名の報告者を個別に招聘するのではなく、二名が一体となった運営が可能になるように人選をおこなってきた。さらに、いずれの報告者もテーマに関する専門家であるにとどまらず、ファシリテーターとして場づくりに関与できる報告者である。その点は、他の分科会と大きく異なる。これによって、通常の分科会運営とは異なって、レクチャー＋ワークという一貫した運営が可能になっている。こうした裁量権を与えられていることに心から感謝すると共に、今後とも報告内容にとどまらず、対話の手法自体の経験を積み上げていくことにしたい。

参考文献

- ・ L. Dee Fink『学習経験をつくる大学授業法』（玉川大学出版部、2011年。）
- ・ Donald A. Schon『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』（ゆみる出版；2001年。）
- ・ 山本以和子「学習成果についてのリフレクション」筒井他著『教育の質保証に向けた授業見学者による授業リフレクションの意義』『大学教育学会誌』第36巻第2号（大学教育学会、2014年11月。）
- ・ 筒井洋一「授業をオープンにすると、学生の学びが変わる—見学者や授業協力者が授業を創る—」『ヒューマンスキル教育研究』第22巻（秘書サービス接遇教育学会、2014年3月。）